

指導内容	学 習 活 動	備 考
1 うさぎ 十 五夜 わらべ 唄 について の理解とイメ ージ化	・月見の経験や、日本 の昔からの子どもの 歌について話し合っ たり聞いたり歌った りする。	・既習のわら べ唄
2 曲想を生か した歌唱表現 ・曲想の感得	・気持ちをこめて歌う ・みんなで・ひとりで ・うさぎと子どもの間 答唱	・情景をおも うかべて ・前記歌詞を 参照
3 身体表現		

- ・ことばのリズム（ピョンピョン、ケンケンピョン、ポップポップジャンプ）の中で自由にとぶ
  - ・歌いながら、うさぎになって自由にとぶ。
- 備考 子どものとぶのを見て下記のようなのがでてきたら

①歩いてひざ屈伸ピョンピョン ②走ってピョン、片足ケンケン走ってピョン ③ホップホップジャンプ

次の構成で動いてみる。

\* 曲は、A B Cの部分に分けてあるが、Aの部分は、わらべ唄の昔から伝承された原型であり、B Cの部分は原型にそった「あそび」の発展である。はじめのAの部分のくり返しであそびB Cも、同様にして最後に三部分をつづけてまとめる。（楽譜と具体的展開例省略）

上記実践例は、私の手がけた1部である。まだ指導の過程を一般化するまではいかないが、これらの実践を手がかりにし、下記に留意し、心から音楽の楽しさや喜びを感じさせ、生き生きとした表現活動へ導くことのできるものを心がけていきたいと思う。

#### 留意事項

- (1) 学習の過程を重視し、その中で児童の創造的な態度を見つめ育てる。
- (2) 技能を積極的に習得させ、創造的な諸活動ができるように。
- (3) 想像力を豊かにする。〈例、歌詞の朗読、情景をえがく、曲趣にあった表現を工夫等……〉 以上

関しての感覚)〈最重要〉

- 1 リズム感…・基本リズム ・アクセント ・拍子  
・舞曲のリズム
- 2 旋律感…・旋律線 ・順次進行 } 調性  
・跳躍進行 } 音階
- 3 ハーモニー感…・和音 ・和声 } 転調  
・終止形 ・TDフレーズ } 旋法
- 4 フレーズ感…・リズムフレーズ ・動機 ・反復  
・模倣 ・変化 ・形式
- 5 速度感…・速度及びその変化
- 6 強弱感…・強弱 ・強弱の変化
- 7 音色感…・楽器の音色 ・音の明暗

B 表現技能…(表現技能の要素に関するもの)

- 1 唱奏法…・レガート ・スタッカート ・マルカ  
ート ・アクセント ・テヌート ・リタルダン  
ド…等
- 2 輪唱奏法…・歌い出し ・かけ合いとハーモニー  
・バランス
- 3 合唱奏法…・ハーモニー ・バランス ・主旋律  
と対旋律によるおりなし ・アンサンブル
- 4 発声法…・姿勢 ・呼吸 ・発声 ・発音 ・共  
鳴 ・アタック
- 5 演奏法…・各楽器の取り扱い ・演奏のしかた

C 読譜や記譜の能力…(表現活動を通して体得するもの)

- 1 聴取…・拍子の違い ・リズムの変化 ・調性  
・和声の聞き分け
- 2 読譜…・リズム唱 ・リズム奏 ・旋律の視唱,  
視奏
- 3 記譜…・音符 ・休符・記号 ・リズムや旋律,  
和音の写譜及び聴取記譜
- 4 楽譜…・音符, 休符, 諸記号についての呼び方や  
意味・作詞, 作曲, 演奏に関する理解

D 意欲や態度…(主体的, 創造的な学習につながるもの)

- 1 表現意欲や態度…・歌いこむ気力 ・練る努力  
・追求の構え
- 2 鑑賞の意欲態度…・聞きとる注意力 ・味わう習  
慣
- 3 協力的な心, 態度…・協力してより美しい表現を  
しようとする態度

以上が音楽諸能力の内容である。目標を設定する場合  
前記創造面では何を, 上記諸能力面では, 何と何を, と  
明確に把握し, 片手落ちにならないようにすることが大

切である。

(4) 指導過程の改善を目ざして「実践例」視点

ア 児童の主体的な学習への取り組みを願って

イ 音楽的感覚の発達と, 諸能力の定着を願って

ウ 指導過程は, 児童にもわかるように, 学習のしか  
たが身につくよう配慮

### 第三学年音楽科学習指導案

KM小にて, 近藤すなほ

1 曲名 うさぎ

わらべ唄  $\frac{2}{4}$   $\text{♩} = 100$

2 設定の理由

従来, 数育の現場において「わらべ唄」の指導は,  
ただ歌わせればよいとか, 歌わせて説明だけに終って  
しまう程度にとどまっていたようである。「わらべ  
唄」の教材価値が充分研究されているとは言えなかつ  
た。今回は, ただ歌いあそびだけに終るものとしてで  
はなく, それをステップに表現活動としてより発展的  
に展開してみたいと思う。

歌詞→うさぎうさぎなに見てはねる(4小節)

十五夜お月さま見てはねる(5小節)

これは, わらべ唄独特のことばに即した旋律構成な  
ので, 西洋の音楽形式で表記するのはむずかしいが,  
(4小節)(5小節)の一部形式と考えてよいと思う。

3 目標

- ・日本音階に対する感覚を養う。
- ・気持ちをこめて, レガートに歌う技能を養う。
- ・身体表現を工夫し歌に合わせて遊戯する。

＊・創造させるもの(身体表現の工夫)

- ・身につけさせたいもの(日本音階に対する感  
覚, フレーズ感, レガート唱)

註 歌詞の中にある“はねる”ということばを生かし  
ことばのリズムの中で, さらに曲の中で, うさぎに  
なっているいろいろな飛び方をしながら楽しく踊る。

＊身体表現を通し, リズム感, 拍子感及び創造性を養  
う。

4 計画

- ・情景把握とわらべ唄の理解及び歌唱表現…1時間
- ・歌唱表現(問答唱)と身体表現の工夫……1時間

5 展開

\*ここでいう「わかる」ということは、楽曲の美しさや、それを支えている要素を、全体的に統合的に、あるいは、部分的分析的に感じとってわかることである。また、自分の描くより美しい音楽像と、自分たちの表現を比較し、感じとることができることである。

### 教材の構成について

#### ① 創造（つくりだす）の視点から

ア 教師が、この曲の学習を通してつくりださせたいと願うものは何か。

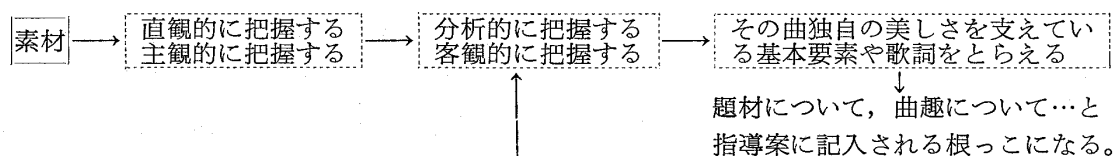
（楽曲独自の美しさに追った表現、つまり**曲趣に迫った音楽像**）

註・音楽像は、同じ曲であっても表現形（独唱奏、斉唱奏、輪唱や合唱奏等）や、編曲による表現形式、楽曲の解釈、表現能力などの違いによって多少変わってくる。

・音楽像は、楽曲と演奏者（児童生徒）との出会いによってつくりだされるものであるから、演奏者の能力の差によって多様な次元のものがある。

\*上記のように創造は、曲趣に迫った音楽像であり、それを児童生徒につくりださせたいという願いであるので、**学習目標の中心**になるのは当然のことである。

#### イ 音楽像のとらえ方



- 分析の観点
- A. 音楽本来の要素 → ・リズム ・メロディー ・ハーモニー ・フレーズ（形式） ・調性
  - B. 表現上の要素 → ・強弱及びその変化 ・速度とその変化 ・音色
  - C. 表現技能の要素 → { ・独唱奏 ・斉唱奏 ・輪唱奏 ・合唱奏に関する技能  
・発声法 ・唱法 ・演奏法…等
  - D. 歌詞について → ・意味内容 ・特徴 ・感じ ・イントネーション ・アクセント ・発音…等

#### ウ 教材の系統について

教科書は、系統等を考えに入れて編んだ一素材集である。したがって、それぞれの楽曲は、ばらばらでなく、つながりをもって位置づけられている。さらに、楽曲は独自の美しさを支える基本要素のつながりをもっている。（学年にまたがって）…（例1）

\*上記のことを念頭におき、教材の位置づけをしっかりとすることが大切である。（特に中心教材を組み替える場合）

#### 例1

夜汽車 ↓ 4年 （二部合唱）  
海 ↓ 5年 （三部合唱）  
冬げしき ↓ 5年 （三部合唱）  
ふるさと ↑ 6年 （三部合唱）

ゆったりした4分の3拍子のリズムをもった合唱曲としてつながりをもっている。

#### ② 技能（身につける）の視点から

音楽的諸能力の低い児童生徒には、より美しい音楽像をつくりだすことは非常に困難である。「つくりだそうとするもの」がはっきりしていても、つくりだす能力が低ければ、より価値の高い音楽美はつくりだせない。したがって音楽的諸能力は、児童生徒の実態に応じて、それぞれ場で計画的に確実に身につけさせていかなければならない。

\*創造性を養う学習の展開をしていくための重要な支えになるもの＝音楽的諸能力→広い意味の音楽性をさす。

#### ア 音楽的諸能力の内容

（下記能力は、単独でなく有機的統合的に学習され、身につけられることが多いが、能力調査の結果を見てわかるように、教師が意図的に計画的な展開を積み重ねないと身につかない。しかも重要な要素があるということを念頭におくことが大切である）

#### A 音楽的感覚…（音楽本来の要素 ・表現上の要素に

現をさせる。

# 本時の指導

## (1) 本時の目標

- ア. 曲趣を感じとって、気持ちをこめて表現しようとする能力を育てる。
- イ. やわらかな声、はっきりした発音などの歌唱技能を身につけさせる。
- ウ. 3拍子のリズムを感じとらせる。

## (2) 本時の展開 (1/5 時)

学習内容と活動	指導上の留意点	備考
<b>1 既習の歌を歌う</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>「手のひらを太陽に」を身体表現しながら歌う。</li> <li>「ぞうさん」…3拍子を手とひざを打ちながら歌う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身体表現を加えることによって楽しさを高める</li> <li>拍子を意識しながら歌わせる。</li> </ul>	
「うみ」の歌をきれいに歌いましょう。		
<b>2 うみを歌う。</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>レコードを聞く。</li> <li>レコードに合わせて歌う。</li> <li>海に行った話や海の様子を話し合う。</li> <li>歌詞について話し合う。</li> <li>歌詞唱する。</li> <li>身体表現を考えながら歌う。</li> <li>拍子打をしながら歌う。</li> <li>けんばんハーモニカで「ソ」の音を吹いて拍子打ちをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>のびのびとした曲趣を味わわせる。</li> <li>自由にたくさん話させ海原のイメージを広げる。</li> <li>歌詞から情景を考え、どのように歌ったら感じがでるかを考えさせる。</li> <li>鼻濁音「が」きれいに歌えるように。</li> <li>半分に分けて、歌う子と、拍子打ちの子を交代で。</li> </ul>	
<b>3 けんばんハーモニカで、「ぞうさん」とくものす」を吹く。</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>はじめ2小節は歌い、後の2小節を</li> </ul>		

吹く。

4 本時のまとめと次時の予告をする。

註 上記指導案を見て言えることは、

- ・形式  $A(a+a')$   $A'(a''+a''')$  の2部形式となっているが、この曲は  $(a+b)$  の1部形式である。
- ・この曲の学習を通して、何をどう育てていくのか、総体目標が明示されていない。
- ・本時の目標はまあまあであるが、用語の使い方があいまいである。例→表現しようとする能力→態度の方が1年生としてはよい。
- ・学習内容と活動がはっきりしていない。「基礎的なものでは何を、基本的なものでは何を→そのためにどんな活動を意図しているのか、ということが大切だと思う。そこで次に、学習の成立条件についてまとめた上で、望ましい指導過程を考えてみたいと思う。

(3) 音楽的感覚を伸ばし、創造性を育てる。

## 学習の成立条件

この学習を、望ましい形で成立させるためには、内容条件と方法条件が満たされなければならない。この二つが調和されて望ましい学習が進められることになる。次にその両者について考えてみよう。

### ① 内容条件

内容条件としては、学習の対象をはっきりととることが大切である。前記音楽教育における創造性でのべているように、技能（身につけるもの）と、児童生徒にとって新しいものを「つくりだすもの」の両面をおさえてきた。

ア 身につけるもの（技能）〈音楽性をより高めるため〉

- ・音楽的な感覚・表現技能・知識
- ・態度→（すでに身につけているものとの関係で把握しておかなければならない）

イ つくりだすもの〈音楽の美しさを表現するため〉

- ・作曲者の示した楽譜（制約の中で）→個性的表現（楽曲独自の美しさに迫った音楽像）

### ② 方法条件

ア より美しい音楽像を描くこと。

イ 美しさをつくりだす過程を直視できること。

わかること → 表現すること { わかって表現する。  
表現を通してわかる。

〈ラ線的なねり直しにより、よりすぐれた美しさへ高める〉

備考 音楽能力診断プロフィール

3 年

種類	段階	1	2	3	4	5
リズム		0 3 6 7 8 9 10 11 12 13				
旋律		0 2 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 16 18				
ハーモニー		0 4 7 8 9 10 11 12 13 14				
読譜		0 3 5 6 7 8 10 11 12 13 15 17 18 19 20				
創作		0 3 6 9 12 15 18				
鑑賞		0 2 4 6 8 10				

(点線は標準を示す)

5 年

種類	段階	1	2	3	4	5
リズム		0 4 8 9 10 11 12 13 14				
旋律		0 5 7 8 9 10 11 12 13 14 15				
ハーモニー		0 5 10 11 12 13 14 15 16 17 18				
読譜		0 2 3 4 5 6 10 11 12 13 14 17 20 21 23 25				
創作		0 3 6 7 8 9 10 11				
鑑賞		0 2 4 6 8 10 12				

## (4) 結果の考察

① 前記⑥の学年別下位評価点の標準との比較図（プロフィール）から、

ア. 4年生は、鑑賞は標準と同じであるが、他は全部標準を上まわっている。特に読譜において著しい。（この学級は、2年になるとき編成がえをただけで、4年生まで担任はかわっていない。）

備考 1年から合唱指導を熱心にやっていた教師の担任

イ. 2年生は、ハーモニーを除いて標準を下まわっているが、3年、5年ともに、読譜、創作、鑑賞は、標準をやや上まわっている。このことから、一概にいうことはできないが、その後の指導によっては、挽回が可能であると考えられる。

ウ. 上記イと対照的に、リズム、旋律、ハーモニーの感覚で把握する要素については、計画的に系統的な指導の積み上げがないと、年令に応じた標準能力まで挽回することは不可能に近いと考えられる。

② 上記、イ、ウから、リズム・旋律・ハーモニー・読譜の要素の各内容から、特に落ちているものをあげると次の通りである。

ア. リズム→（拍子の聞き分け。リズムの聞き分け）

イ. 旋律→（ある旋律を記憶し、同旋律の出現回数を把握する）

ウ. ハーモニー→（斉唱・輪唱・合唱の聴取判別）

エ. 読譜→（旋律を聞いて階名で記入する）

\*これらが原因で、下位検査が標準を下まわっている。

る。

## ③ 原因及び対策

## 原因

- ・表現能力を高めるための基礎的な指導が断片的であったり、場あたりのであったり、系統的な指導がなされていなかった。
- ・平素の指導計画で、基礎的・基本的なものの位置づけが不明確であった。
- ・この他に、家庭環境・学級の解体などの影響も多少あることは否定できない。

## 対策

- ・今までの指導過程を考察し、不備な点を浮きぼりにし検討する。
- ・音楽的感覚や創造性を育てるための基本的な事項を位置づけた指導過程を作り実践を通して一般化できるようにする。

## 4. 指導過程の改善を目ざして

## (1) 指導過程について

本年度実践されたものの中から、考察の素材としてA校の指導案をとりあげてみる。

第一学年二組 音楽科指導案

指導者 ○○○○

題材 うみ（林柳波作詞、井上武士作曲）

## 題材について

- ・これは新指導要領での歌唱共通教材で  $A(a+a')$   $A'(a''+a'')$  の2部形式の曲である。♪♪♪と♪♪♪のリズムの対比・調和がまことに美しく、歌詞と関連して大海の大きな波のうねりを想起させる。3拍子 ♩=88 の曲である。
- ・このクラスの児童は、歌を歌うことに興味をもっているが、歌詞をよく味わい、ていねいに歌うことができていない。海は夏の到来と共に、子どもたちの願望と楽しみの対象となっている。そこでこの時期に、この曲をとり上げ、大海原を想起させながら、のびのびと楽しく歌う能力を高めたい。
- ・今まで学習してきた3拍子の曲「こいのぼり」「ぞうさん」の学習を発展させ3拍子の楽しい拍子感を、打楽器などで拍子打ちをさせて経験させたい。

## 指導計画（5時間扱い）

- (1) 聴唱法で正しく楽しくていねいに歌わせる…2時間（1/5 本時）
- (2) トライアングルの持ち方、打ち方を習得させ、歌に合わせて打たせる…1時間
- (3) 3拍子のいろいろな曲に合わせて拍子打ちの身体表

# 研究紀要第2号

## ③ 能力点の区間別分布 (百分比)

区 間 \ 学 年	2	3	4	5
35 ~ 39	2.6	0	0	0
40 ~ 44	5.3	0	2.3	0
45 ~ 49	2.6	10.8	2.3	0
50 ~ 54	10.5	8.1	2.3	0
55 ~ 59	13.2	18.9	11.6	26.8
60 ~ 64	18.4	32.4	9.3	19.5
65 ~ 69	13.2	8.1	18.6	9.8
70 ~ 74	23.7	5.4	14.0	14.6
75 ~ 79	10.5	2.7	9.3	9.8
80 ~ 84	0	8.1	25.6	7.3
85 ~ 89	0	5.4	4.7	9.8
90 ~ 94	0	0	0	2.4
95 ~	0	0	0	0

## ④ 音楽能力偏差値

学 年	2	3	4	5
能力偏差値	47.5	42.4	53.1	48.6
標準偏差	11.8	14	13.8	16.5

## ⑤ 能力偏差値段階別分布 (百分比)

段階	音楽能力 偏差値	2年	3年	4年	5年	段階 評価
7	75~以上					最優
6	65~74		8.1	14	11.9	優
5	55~64	34.2	8.1	34.9	16.7	中の上
4	45~54	26.3	13.5	32.6	26.2	中
3	35~44	26.3	43.2	14	38.1	中の下
2	25~34	10.5	18.9	4.7	7.1	劣
1	0~24	2.6	8.1			最劣

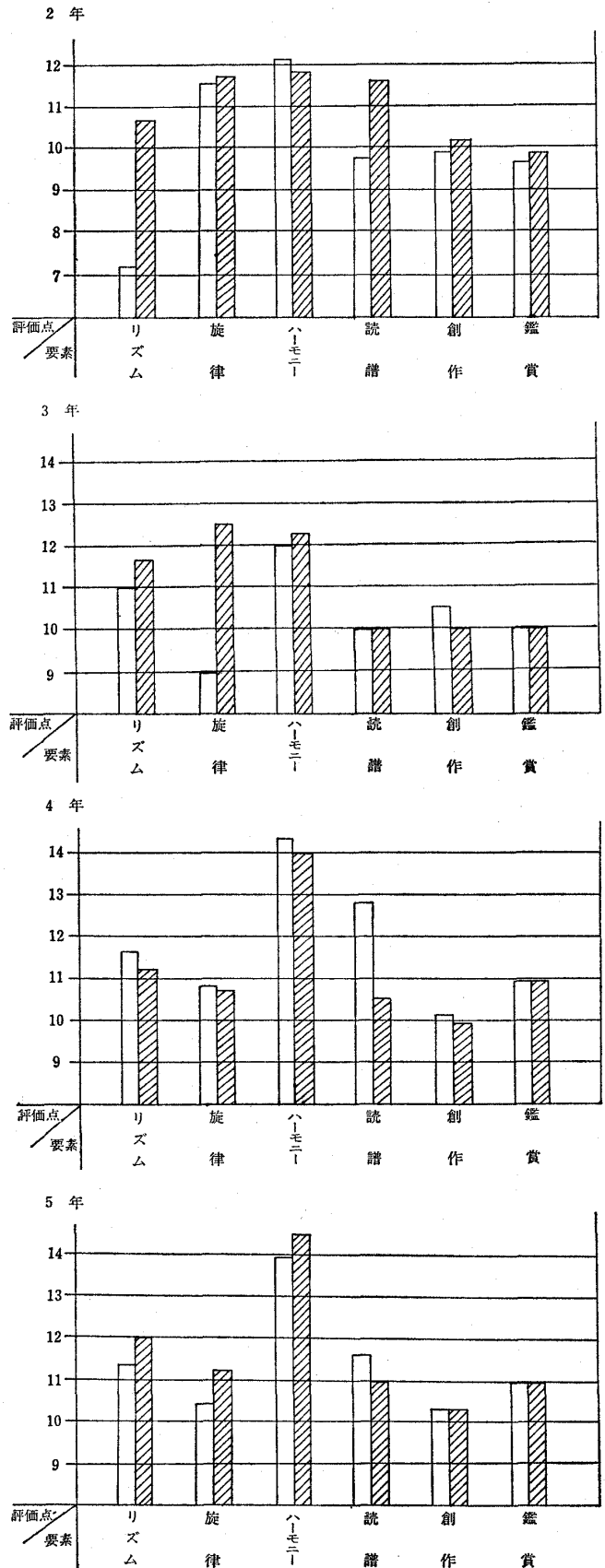
\*前頁の③④の分布表から、4年生を除いて、中の下及びそれ以下に位する児童が多いことがわかる。

例、④の能力偏差値段階別分布表から(中の下以下)

2年生 (39.4%)      3年生 (70.2%)

4年生 (18.7%)      5年生 (45.2%)

## ⑥ 下位検査別評価点の標準との比較(当学年 標準)



力であり、上記音楽の諸要素に関する音楽的感觉を基盤とした音楽的感受性（音楽の聴取力）が、鑑賞の能力である。

\*上記感覚について今少しくわしく書くと、

- A) 高低感—音の高い低いを判別する能力
- B) 長短感—いくつかの音を比べてみた時に、どの音が他の音よりどの位長いか、短いかを判断する能力
- C) 強弱感—音の強い弱いの違いや、だんだん強まったり、弱まったりする変化などを判別する感覚能力
- D) 音色感—同じ高さの音でも、バイオリンとピアノとでは音色が違ふ、これがわかる感覚能力

これらの音に対する感覚能力のいくつかが組み合わされてくると、そこに音楽的感觉が生じてくる。「高低感」「長短感」とが一諸に訓練されると、メロディーに対する感覚が発達してくる。この音に対する感覚能力（音感覚）を楽しい雰囲気と教材とでやさしく育てていくと、これらの音感覚がいろいろ結びついて音楽的な感覚に育っていく。こうして育ちはじめた音楽的感觉に表現技術が結びついた時に、すばらしい音楽表現があらわれてくる。

ふつう、音楽的感觉という場合、リズム感・メロディー感・ハーモニー感の他に、さらに速度感・強弱感・音色感などを含めて、いわゆる音楽構成に関する感覚を指している。それらは、

- A) リズム感—音の長短や強弱が組み合わされて、いろいろなリズムが生まれるが、その最も大切なものが拍子の感覚である。その拍子によっていろいろなリズムが生まれる。
- B) メロディー感—リズムと音の高低が組み合わされてメロディーが生まれる。メロディーのもつ自然的方向感・終止感などを身につける必要がある。
- C) ハーモニー感—いくつかの音が組み合わされて生ま

れる豊かな響・色合いを感じる。

- D) フレーズ感—メロディーやハーモニーが流れていく時に、そこに小さな区切りや大きな段落を感じる能力で、メロディーを本当に歌ったり弾いたりするために大切な感覚である。

これら、上記の音楽的感觉が総合して身についた時、音楽性が見られるようになる。つまり音楽性とは、いろいろな音楽的感觉を総合した音楽に対する可能性であるといえる。

### 3. 音楽能力調査より

- (1) 調査に使用したテストの名称

音研式標準音楽能力診断テスト（音楽心理研究所編）

- (2) テスト内容の構成

リズム	・2拍子か3拍子か ・リズム譜と同じか ちがうか ・2つのリズムの異同（聞いて）
旋律	・2つのふしの異同（聞いて） 反復 ・ふしの長調か短調か
ハーモニー	・2つの和音の異同 ・終止感 ・輪唱と合唱の区別（聞きわける）
読譜	・ふしと楽譜の照合 ・ふしを聞いて階名で書く
創作	・まとまりのよいふし、悪いふしを聞いて判別する ・作曲したふしのよしあし
鑑賞	・どんな感じのする曲か

- (3) 調査結果

#### ① まとめ種類

検査の採点 得点 換算 換算点

評価点 音楽能力点 音楽能力偏差値 音楽能力段階問題正答率 要素別評価点 要素別プロフィール

#### ② 学年別男女別能力点

学年 能力	2				3		4		5	
	2	3	4	5	男	女	男	女	男	女
能力点 (平的)	62.6	62.4	70.6	68.5	60.2	64.9	56.7	68.4	66.3	75.5
能力点 (百分比)	67.3	67.1	74.3	72.0	64.7	69.8	61.0	73.5	69.8	79.5
標準偏差	11.9	11.6	14.2	15.2	／		／		／	

註 前記表の能力点（平的）から男女差を比較してみると、2年では「4，7」であるが3年になると「11，7」と大きくひらき、4年，5年と学年が進んでも変化が見られない。ある程度固定化されているように受

け止めることができよう。このことから、低学年，特に2年生の指導に問題はないか、又男女の性別からくる宿命なものがあるのかどうかということも今後あわせて考えていく必要があるように思われる。

ある。

## ② 創造性に対する定義の要約

ア. 創造者とは、既存の要素から、彼にとっては新しい組み合わせを達成する人である。

イ. 創造とは、この新しい組み合わせである。

ウ. 創造することは、既存の要素を新しく組み合わせることにすぎない。(ヴァン・ファンジェ著 岡村和子訳 創造性の開発 p.14)

\*以上の諸規定は、多分に、科学技術的な観点に立った考え方である。一般的芸術における創造は少し、これとニュアンスが違うように思われる。

## (2) 芸術における創造、創造性

芸術における創造性においては、「既存の要素の組み合わせ」というようなことが、ほとんど無意識に、しかも直観的に行なわれる。また「特定の目的を常に満足せしめるような」価値性についても質的にだいぶ違うものがある。芸術における創造を最も簡単に考えると、**新しい価値あるものを作りだす行為と解される。**

創造 { 今までになかったもの  
          { その人以外にできないもの } を作ること

創造性 { 創造力としてとらえる見方 (新しいもの  
          { を作り出す能力)  
          { 人格特性という形でとらえる見方 (情意的な側面を中心)

## (3) 創造力とは (講座「創造性の教育」3より)

- ① 感受性→あたえられたテーマに対して、美しい・醜い・だいじだとか、つまらぬとか、敏感に反応する力。
- ② 柔軟性→自分の能力を伸縮自在に事態に適応させる力。
- ③ 分析と総合→心に描く映像を分析したり総合したりする力。
- ④ 構成力→一貫性ある独創力。

\*健康な人間であるならば、誰でも**自己実現の欲求**があり、いろいろな拘束から離れて、心の奥底から生ずる要求のままに、その実現をはかりたいという願いがある。それが創造活動を支える重要な条件であることはいうまでもない。

## (4) 音楽教育における創造性

創造性の規定については前記を含め、いろいろの論があるが、音楽教育における創造性について、ここでは次の2点にしばってみた。

### ① 自己実現の能力を育てる。(前記\*印参照)

そのためには、まず、自由に自己を表現する能力や

態度を養わなければならないことはいうまでもない。**児童生徒が自分の持っている技能や過去の経験によって得た全知全能をあげ、心をこめて歌っているとき→曲と自己が一体化している境地にある。**そこには曲の美しさが心の奥で把握され、いきいきとした感動がある。このような場面のある学習の積み重ねが、自己実現の能力を育てることになると考えたい。

### ② 価値ある新しいものを生み出す能力を育てる。

ここでいう新しいものとは「人類にとって新しいという成果」ではなく「その人にとって新しいという過程」の創造である。教師にはすでにわかっている事柄であっても児童生徒にとっては過去の経験からは未知であり、不思議なことが数限りなくある。それらのある事象に直面して感動的につかんだものが、映像的内容(想像)に変わっていき、さらにそれが、精神的・物質的な形に現われたときに創造といえることができる。このような精神活動がくり返されることにより、創造の内容がより豊かに、より価値の高いものへと伸長していくものと思う。激しくゆれ動く現代社会の中で、創造の過程を重視した学習の積み上げは特に大切であり、これが強い人間回復にもつながるものと考えたい。

註 新指導要領(小学校)の目標は、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽性を培うとともに、音楽を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う。とあり、現行での豊かな創造性を養うが削除されているが、「音楽性」の中には当然「創造性」が含まれていることを理解し指導にあたる必要がある。

## 2. 音楽的感覚について

指導書(文部省)を開くと

「例えば、ある知的事項の指導を行う場合、これを単なる知識として取り扱うのではなく、それ以前に音楽の表現や鑑賞の活動を通して音楽的感覚を十分に身につけ、その上でその指導が行われなければならないとするものである(p.8~9)」とある。では、音楽的感覚とは何か、一応しっかり把握しておく必要があるので、次にまとめておく。

註 音楽的感覚とは

**リズム感・メロディー感・和声感・フレーズ感・速度感・強弱・音色(七要素)...**など音楽を構成している諸要素に関する感覚である。それらを基礎とした表現の技能や楽譜についての理解と視唱(奏)の能力が、音楽科の目標(2)に示されている表現能



# 音楽的感覚を高め創造性を養う

## 音楽科指導過程の研究

近 藤 す な ほ

Study on the Music Pedagogy to Quicken the Musical Sense and develop the Originality.

by Sunao Kondo

### 主題設定の理由

#### 1. 平素の音楽指導の現状から

多くの現場では、たとえば「歌唱」中心の学習で、どこで創造性を育てようとするのか。「創作」や「基礎」の指導は、何と関連づけてどのように進めるか。また、音楽科でいう「創造性」とは何か…など、確たる信念のないままに場あたりの展開しているところが現状である。そこで本校の学生や現場の学級担任の先生方が、誰でも心がけることにより、極端な落ちこぼれがなく進めることができるように指導過程を考察し一般化をはかりたい。

#### \*備考 千葉県の実状

- ・地域、学校、学級間の較差が大きい。
- ・諸領域に落ちこぼれが見られる。
- ・基礎的能力が学年に応じて伸長していない。
- ・学校音楽の生活化が不十分である。

〈教育実践の手びき、S53年4月より〉

#### 2. 児童の実態から（音研式音楽能力診断テスト）

学級により多少の差はあるが、共通して言えることは

- (1) 音楽能力が、中から中の下に集中している。
- (2) 優劣が、特定の要素にかたよっている。特にリズム感、旋律の記憶、ハーモニーが劣る。

〔上記(1)の原因として、指導の過程や方法に問題があるように思われる〕

その反面、リズムを聞いてリズム譜との異同、二つの和音の異同については、標準を上まわっている。〈資料として、船橋市・相模原市教育研究所の調査による〉

\*したがって、これらの諸要素をとり入れた指導過程を吟味改善しながら、特定の要素にかたよることなく、調和のとれた能力の向上をはかる必要がある。

### 研究の目標

- 1 諸要素（特に大切な）をとり入れた指導過程をくふうし、現場での実践を通し、改善をしながら一般化をはかる。
- 2 上記の実践を通して、特に音楽的感覚を身につけ創造的な表現能力を伸ばし、音楽を愛好する心情を育てるとともに、基礎能力の定着をはかる。

### 研究の仮説

- 1 児童の能力の実態を把握し、今までの指導過程を分析し、改善することにより音楽的感覚が十分につき、創造的表現力の向上が期待できる。
- 2 児童の能力に応じた系統的な教材を整えることにより・効率的な指導ができ、基礎能力の向上や、創造性もより一層伸ばすことが期待できる。

### 研究の内容

#### 1. 創造性について

創造性を養う教育は、音楽科だけで行うものではなく、教育全般に要請される問題である。しかし科学技術における創造性と、音楽における創造性とは、その動機や過程においてかなり異なるものがある。したがって、音楽における創造性の考え方をまず明確にしておく必要がある。

#### (1) 定義（一般的）

① 創造性とは、われわれの過去の経験を深く掘りさげて、これらの選択された経験を結びあわせて、新しいパターン、新しいアイデアまたは新しい所産をつくり出すことである。（J・A・スミス教授著書 創造的授業の条件設定 p.27）これは、すべての承認されている定義のもっとも一般共通のもので